



# 大自然の魔法師アシュト、 廃れた領地でスローライフ 5

Q L P H Q L I G H T

さとう  
*Satou*



アルファライト文庫

# 主な登場人物 CHARACTERS

**ヒンケル**  
リュドガの副官。  
イケメンで面倒見が良く、  
気苦労が絶えない。

**ミュア**

銀猫族の少女。  
一人前のメイドさんを目指して修業中。

**シェリー**  
アシュトの妹。  
「冰姫」の異名を持つ、  
元・王国最強の魔術師。

**エルミナ**

希少種族ハイエルフの美少女。こう見えて大のお酒好き。

**リュドガ**  
アシュトの兄。  
「雷帝」として名を知られる、  
大国ピッグバロッグの将軍。

**アシュト**

本作の主人公。  
魔法適性が「植物」だったために家を追放され、  
魔境オーベルシュタインの領主となる。

**ルナマリア**

ミュディの姉にして、  
リュドガの副官。  
見た目とは裏腹に脳筋。

**ミュディ**

優しくて家庭的なアシュトの幼馴染。  
魔法適性は「爆破」。

## 第一章 春の訪れ

すっかり春の陽気になつた。

雪がわずかに残つているが、すぐに消えるだろう。庭にあつたかまくらには魔法がかけられており、妹のシェリーに解除してもらうとあつという間に崩れてしまった。

少し悲しいが仕方ない。これも春が到來した証だ。

雪が溶けたことにより、農園や果樹園も再開する。

俺の魔法で土を耕し、ハイエルフや銀猫族が種や苗を植える。

以前手に入れたクリの苗木も植え、植木人のウッドにお願いして増やしてもらつた。これでクリがいつでも食べられる。

あ、そうそう。暖かくなつたから、ウッドや、ウッドの仲間であるベヨーテが外で遊べるようになった。そこで、ウッドたちと一緒に門番のファンババのもとへ行つた。

『ア、アシュト』

「やあファンババ。ようやく春になつたな」

植物の巨人ファンババは、のんびりしたまま空を見上げていた。

だが、ウッドやベヨーテの姿を見ると、喜びをあらわにする。

『オオ！ フタリトモキタノカ！ オラ、ウレシイ！』

『ヒサシブリダナ……マタ、セワニナルゼ』

『フンババ、フンババ！ マタイツショ、マタイツショ！』

うーん、植物たちの会話だ。

ウッドはぴょんぴょん跳ね、ベヨーテは近くの木に寄り掛かつて帽子を傾けていた。日差しは柔らかい。今日も一日晴れそうだ。

俺はのんびりと喰いだ。

「春だなあ……」



村の外はずに行つてみると、早くも教会の建設が始まっていた。

鍛冶場かじばでは、スライム製のステンドグラスが作られ、教会の鐘かねも立派なものが作られていた。

「おう村長！」

「ここにちは、アウグストさん」

ヘルメットをかぶり、図面を広げていたのはエルダードワーフのアウグストさんだ。

他のエルダードワーフやサラマンダー族に指示を出し、現場監督かんとくの立ち位置で仕事をしている。

アウグストさん……というか、エルダードワーフとサラマンダーたちは上機嫌じょうきわんだった。

「久しぶりの大工仕事だ。しかも村長と奥さんの結婚式場となると、気合きあいも入るつてもんだ。見てろよ、ワシらエルダードワーフが最高の教会がんぱくを建ててやらあ！」

「あ、ありがとうございます。期待しています」

教会に関しては問題なさそう。ここが完成したら、念願の結婚式だ。

結婚式で着るドレスのデザインについては、ミュディを中心には毎日話し合っている。

俺が混ざろうとしたらシリエリーに押しのけられた。まあ楽しみは取つておこう。ちなみに、俺のタキシードは白きらきらを基調とした一般的なもので落ち着いた。

「そういやあ、さつき嬢ちゃんたちが様子を見に来ちたぜ

「え、ミュディたちですか？」

「ああ。みんな仲良くな。しかも『これから毎日来ます。頑張つてください♪』って言つてよ、差し入れまで持つてきたわい

「そ、そうですか……」

ミュディたち、気になつてゐるのか……まあいいか。

さて、村の見回りを続ける。

住人たちは外で仕事を始めていた。龍騎士たちに挨拶<sup>あいさつ</sup>したり、すれ違うハイエルフや銀猫族にも声をかけたりした。モグラみたいなブラツクモール族もちよこちよこと歩いて仕事をしている。

解体場に向かうと、魔犬族<sup>まけんぞく</sup>の男子三人とデーモンオーガの二家族がいた。

「あ、おにーたん！」

俺に最初に気が付いたのは、デーモンオーガの少女エイラちゃんだった。むか

手を振ると、魔犬族の男子三人は頭を下げ、デーモンオーガたちは友好的<sup>むか</sup>に迎えてくれる。

「お疲れ様です、村長」

「こんには。ベイクドさん、アルノーさん、ゲイツさん」

魔犬族の男子三人。リーダーのベイクドさん、アルノーさん、ゲイツさんだ。

最初は狩りをしてたけど、デーモンオーガ一家が来てからはもっぱら解体業に力を注いでいる。

ところで……この三人、彼女がいるんだよな。

「あ、あの？ 村長？」

「お、オレたちの顔になにか付いてます？」

「おい、なにかまずいことやつたんじゃ……」

しまった。ついついじっくり見てしまった。俺は慌てて話題を振る。

「えーと、今日はみなさんお揃い<sup>そろい</sup>でどこへ？」

よく見ると、デーモンオーガたちは完全装備<sup>そろび</sup>だ。

聞くまでもない気がするけど、父親のバルギルドさんが答えてくれた。

「これから春の初狩りに出る。暖かくなると大物が起きだすからな、期待して<sup>じき</sup>いてくれ」

案の定、狩りでした。大物を期待しています！

ベイクドさんは、解体の準備というわけか。道具を準備してやる気満々だ。  
すると、娘のノーマちゃんが俺の腕を抱きかかる。エイラちゃんも反対側にじやれついた。

「ねーねー村長。大物狩つてくるからさ、春の宴会をやろうよ！」

「やろーよ！」

「え？ 春の宴会？」

「そーそー！ みんなで集まつてさ、おいしい料理食べて、飲んで騒いで……んぎやつ！」

そこまで言つた時、母親のアーモさんがノーマちゃんにゲンコツした。

「こらー！ 村長を困らせないの！」

「いつたあ～……」

「きやはは！」

エイラちゃんは楽しそうだ。それにしても春の宴会か……悪くないかも。  
申し訳ありません村長。ノーマの言うことは気にしないでください

「ええ～……いいじやんいいじやん！」

「ノーマ！」

「は～い……」

そう言つて、デーモンオーガの画家は狩りに出かけた。

怒られたノーマちゃんを弟のシンハくんがからかい、ノーマちゃんは反撃し、ディアム  
ドさんの息子キリンジくんに止められ、エイラちゃんがケラケラ笑い、互いの両親が微笑  
ましげに見守る。なんとも平和な光景だ。

「う～ん……宴会、かあ」

文官のディアーナに相談してみるか。

というわけで、村の中枢……もとい、執務邸へ向かう。

「なるほど、春の宴会……新年会ですか。いい考えですね」

執務邸でディアーナに相談すると、意外にも好感触だった。

「冬の備蓄がまだ余っていますし、交易も再開します。ある程度消費しておく方がいいで

というわけで、春の新年会を行うことになった。

しよう

「お、じゃあ」

「はい、いい機会です。住人たちも喜ぶと思いますよ」

「よし、じゃあ新年会を開催するか。準備もあるし、日程は……」

「こちらで調整します」

「わかった。じゃあ俺はシルメリアさんに伝えてくるよ」

「はい。お願いします」

というわけで、春の新年会を行うことになった。

## 第二章　にやんことわんこの焼き物体験

新居に戻ると、銀猫族の少女ミュアちゃんと、魔犬族の少女ライラちゃんが、銀猫族のリーダーであるシルメリアさんに怒られていた。  
ふむ……割れた花瓶、傍に落ちているボール、垂れた二人のネコミミとイヌミミ……なるほど、ミュアちゃんとライラちゃんがボール遊びをしていたら、ボールが部屋に飛んでいつて飾つてあつた花瓶を割つてしまつたというところだろう。

「お帰りなさいませ、ご主人様。申し訳ありません、すぐに片付けてますので」「ん、ああ、はい」

「ミュア、ライラ、これからは気を付けるように」

「にやう……」

「わうう……」

「わうう……」

激<sup>げき</sup>おこのシルメリアさんは手早く花瓶を始末して部屋を出た。

俺は二人の頭にそつと手を乗せる。

「大丈夫?<sup>けいじよ</sup>? 怪我<sup>けが</sup>はしない?」

「にやあ……怒られちゃつた」

「わふ……花瓶、割れた!」

「よしよし。ちゃんとシルメリアさんにごめんなさいはした?」

二人はぶるぶる首を横に振る。どうやら、シルメリアさんの雷が落ちた直後に俺が来たせいで、謝<sup>あやま</sup>るタイミングを逃してしまったようだ。とりあえず頭をなでなで……

「ふにゃあ……」

「くうん……」

よし、薄<sup>うす</sup>けた。さっそく事情を聞くと、俺の推理<sup>すいり</sup>は当たっていた。

「マンドレイクとアルラウネがウッドたちと日向ぼっこしてるから、わたしとライラで

ボール遊びしてたの」「わうう。それで、ミュアの投げたボールが窓から入って、花瓶を倒しちゃったの」「なるほど……そこをシルメリアさんに見つかって怒られたってことか」

「…………」

「ん? ……違うの?」

あらら、またネコミミとイヌミミが萎<sup>しお</sup>れてしまつた。別の理由があるらしい。

「二人とも、怒らないからちゃんとお話をしてもうらん」

「にや……」

「わう……」

ミュアちゃんとライラちゃんは顔を見合させ、俯<sup>うつむ</sup>いたまま話し始めた。

「あのね、花瓶を割っちゃつたから……怒られると思って、かくそうとしたの」「わう……お花を拾つて、ぞうきんで床を拭<sup>ふ</sup>いて、破片<sup>はへん</sup>を拾つてたら、シルメリアに見つ

かつて……いっぱい怒られたの」「なるほど……」

つまり、証拠<sup>しじゆ</sup>隠滅<sup>こいんめつ</sup>か。

懐かしい。子供の頃、俺もやつたなあ……リュドガ兄さんの本を破いちやつて、自分の部屋に隠しておいて、あとでこつそり町の本屋で同じの探して戻<sup>やぶ</sup>そうとして……でも、

リュドガ兄さんには全てお見通しで、町の本屋で兄さんが俺を待ち伏せして……ちょっとだけ怒られて、そのあとで本を買ってくれたんだ。

「にやううシルメリア、怒つてた」

「んー……確かに、それは悪いことしちやつたね」

「くうん……ごめんなさい」

「うん。でも、それを言うのは俺にじやない。シルメリアさんにきちんと謝ろうね」

「でも、ゆるしてくれにやいかも……にやあう」

「わううん……」

あらら、泣いちやつた……不謹慎ふきんしんだが、泣き顔かわいも可愛い。

俺は花瓶の置いてあつたサイドテーブルを見て……思いついた。

「そうだ！ いいこと考えた」



「……で、ここに来たってわけか」

「はい！ よろしくお願ひします！」

「にやう！ よろしくー！」

「わん！ よろしくー！」

俺とミュアちゃんとライラちゃんがやつてきたのは、エルダードワーフの鍛冶場。

鍛冶場で作るのは鉄製品だけじゃない。家具や置物や細かな日用品、ディミトリ商会やマーメイド族に卸す商品など、様々なものを作っている。

ほとんど足を運ばなかつたから気付かなかつたが、改めて見ると工房の建物がかなり大きくなつていた。各部門ごとに作業をしていくようだ。

俺が挨拶したのは、この責任者であるラードバンさんだ。最初期にいたエルダードワーフ五人のうちの一人で、鍛冶関係はこの人にお任せである。

「ラードバンさん、この子たちと一緒に新しい花瓶を作りたいんです。どうかご指導、よろしくお願ひします」

「おねがいしまーすー！」

ミュアちゃんとライラちゃんはペコっと頭を下げた。

そう、割れたなら作ればいい。替えの花瓶はあるだろうが、反省の意を込めて手作りでやろう。

「ま、別に構わんぜ。こつちに来な」

案内されたのは、ハイエルフ数人が作業している焼き物関係の工房だ。

花瓶や茶わん、水差しみたいな陶器から、ディミトリ商会に卸す工芸品なんかも作つて

いる。

「おい、指導してやつてくれ」

「あれ、村長じゃん？」

「ミュアとライラも、珍しいね」

髪を乱雑にまとめ、手を泥まみれにしたハイエルフだ。確かに名前は……

「ええと、ピンネとカトラだつけ？」

「お、正解！ さつすが村長、ほとんど喋ったことのないあたしらの名前を覚えてるなんてね！」

「嬉しいねえ、ふふ、さつすがエルミナの旦那さん！」

ハイエルフって、農園だけじゃなくていろんな場所で働いているんだよな。すると、ピンネが言う。

「はいはい、あたしは村長、カトラは子供を担当するね」

「おねがいしまーす」

「はいよろしく。じゃあこっちはねー」

カトラは、子供を連れて「ろくろ」のもとへ。このろくろで陶器を作るそうだ。俺は、ピンネの使っているろくろの傍に座り、さつそく花瓶作りを習う。

「まず、あたしがお手本を見せるね」

ピンネが練った粘土をろくろの上に置くと、どういう原理なのか、ろくろが回転する。そしてピンネが器用に手を動かしたら、見る見るうちに丸くデコボコだった粘土が綺麗な筒状の形に変化していく。

たった数分で細い筒状の粘土が完成した。

「ま、初めてなら形に拘らず、『花瓶のような形』を目指して作るといいよ。じゃあ次は

村長ね」

「え!? も、もうやるのか?」

「そりややらないと始まらないっしょ」

そういつたわけで、レツツ花瓶作り。粘土をセットして、ろくろが回転……

「え、ええと……」

とりあえず、ピンネの真似をして粘土に手を添える……が、これが思ったより難しい。少しでも手の位置がずれると、粘土はぐにゃぐになってしまう。

「どれどれ、ちょっとお手伝い」「え、ちょっと……」

「ほら村長、集中集中」

な、なんということでしょう。ピンネが俺の背中に覆いかぶさつてているではありませんか。そして、俺の両手を掴み、ろくろの回転に合わせて動かしていく……

17 大自然の魔法師アシュト、廃れた領地でスローライフ 5

「ほら、手を固定して流れるように……って、村長？」

「なな、なんだ？」

「……へえ！」

俺は顔が火照っていた。

そりやそうだ。胸は当たつているし耳に吐息といきがかかるし……いやもう、マジで勘弁かんべんしてくれ。

「ふふ、村長ってかわいいねえ」

「勘弁かんべんして……」

結局、完成したのは個性的な花瓶だった。

それから結構な時間が経過し、カトララが声を上げた。

「こつちもできたよ！」

「にやう！ かつこいいのできたー！」

「わうう、わたしもー！」

ミュアちゃんとライラちゃんも、それぞれ花瓶を完成させたようだ。

二人が作ったのは花瓶が一つと、形がそれぞれ違う陶器の、合計で三つ。

「ふふ、花瓶を二人で作つて、あとはシルメリアさんへのお土産みやげなんだって

「へえ、どれどれ」

ミュアちゃんが作つたのはコーヒーカップ。歪な形だが、ミュアちゃんの愛が詰まっている。ライラちゃんが作つたのは湯飲み。こつちも少し傾いているが、ライラちゃんの感謝の気持ちが感じられる。

「あとは乾燥かんそうさせて焼くだけだよー！」

「ああ、よろしく」

こうして、焼き物体験は終わつた。

完成まで結構かかるらしい。まあ仕方ない。

「ああ。たのしみ」

「わふ。ねんど、たのしいね」

ま、そんなに急がなくてもいいか。二人が元気になつて何よりだ。

新居に戻ると、シルメリアさんが新しい花瓶こうぶを持っていた。

少しどキッとしたが、俺は平静を装よそおつて言う。ちなみにミュアちゃんとライラちゃんは

使人邸に帰つたのでこの場にはいない。

「あ、あー、シルメリアさん、その花瓶は？」

「はい。ミュアとライラが割つてしまつたので、代わりのものを」「そ、ですか」

せつかくだし、新しい花瓶ができるまで待つていてほしい。

俺はなんとかごまかすことに決めた。

「え、ええと、また割れるといけないし、とりあえず花を飾るのはやめておきましょうか」「？……は、はい」

「そ、それよりも、少し話があるんです。ちょっといいですか？」

「はい、かしこまりました。ご主人様」

シルメリアさんは一礼し、近くの棚に花瓶をしまった……ふう。さて、本題だ。

「実は、新年会を行うことになつたんです」

「新年会、ですか？」

「はい。春になつたし、これから畠仕事や大工仕事も本格的に始まりますからね。また今年も頑張ろうって意味を込めて、みんなでパーティーとやろうと思つて」「なるほど……だから宴会場の拡張かくちやくが始まっていたのですね。さすがです、ご主人様」

「え」

宴会場の拡張？ き、聞いてないけど。

まあ、住人も増えたし、宴会場はちょうど手狭てせまいだとは思つていただけさ。エンジエル族の整体師や畠仕事に転移で来ているデヴィル族なんかも加えると、三百人以上はいるからな。

「ええと、そこで大変かもしれないんですけど、銀猫たちに豪華ごうかな料——」「お任せください!! 腕によりをかけて作らせていただきます!!」

「うおつ!!」

言い終える前に快諾かいのくしてくれたよ……よっぽど料理好きなんだな。

「と、とはいえ細かい日程はまだ決まってないです。あと、ハイエルフの里やワーウルフ族の村にも参加するか聞いてみるつもりですし……」

「わかりました。全銀猫に伝えます」

「は、はい」

一応、ハイエルフの里とワーウルフ族の村、世話になつている商人のディミトリとアドナル、それと魔界都市ベルゼブブの市長であるルシファーにも新年会のことは伝える予定だ。招待状の手配や料理の準備で、少し時間が必要かも知れない。さて、一度ディアーナのところに戻るか。

## 第三章 新年会の準備

「やあ、アシュト」

ディアーナの執務邸に戻ると、優雅にカーフィーを飲む優男と、その後ろで彫像のように佇むデーモンオーガの男性がいた。

「る、ルシファー？ ダイドさんも……」

「やあ。暖かくなつてきだし、仕事も一段落したんでね。妹の様子を見に来たついでに、君に挨拶しておこうと思つて」

「そ、そろか……」

チラリとディアーナを見ると、「はあ～」とため息を吐いた。ちなみに、ルシファーの妹とは彼女のことである。

ディアーナも聞かされていない、完全なサプライズ訪問だつたようだ。その証拠に、文官娘のセレーネとヘカティーがガチガチに緊張している。

「そ、そ、そう聞いたよ、新年会をやるつて話!!」

「ああ、お前も参加するか？ はは、招待状を送る手間が省けたよ」

「もちろんさ。ぜひとも参加させてもらうよ」

「じゃあ、詳細が決まつたら……ディアーナ経由で知らせるよ」

「ああ、期待してるよ、アシュト」

ディアーナを見ると、なぜかジト目で見られた。

「ふふ、アシュト、ベルゼブブに来るなら知させてくれよ。本気のもてなしで歓迎するか

「アーニー、アシュト、ベルゼブブに来るなら知させてくれよ。本気のもてなしで歓迎するか

「らさ」

「は、はは……わかつたわかつた」

「ちょっと怖い。まさか、巨大な蠅が隊列を組んで出迎えたり……しないよな？」

「あ、それと結婚式も呼んでくれよ!! 友人代表として祝辞を述べるからさ」

「あのな、そういうのは普通俺が頼むもんじやないか？ それにお前とはそこまで深い付き合いじやないぞ」

「つれないなあ……でも、招待はしてくれよ？」

「はいはい」

ルシファーは魔界都市の市長。対する俺は小さな村の村長。はたから見たら対等な立場とは言えないが、俺たちはそんなこと気にしなかつた。

「さて、せつかだし何か手伝おうか？」 ディアーナ、僕にも仕事をくれ

「……部外者に任せせる仕事はありません。お客様はどうぞお寛ぎを」

「はははははっ!! やれやれ、一本取られたね」

ルシファーは、飲みかけのカーフィーを一気飲みした。



次に向かつたのは悪魔商人デイミトリが経営する、『デイミトリの館・緑龍の村支店』だ。

中に入ると、ハイエルフのエルミナがお買い物を楽しんでいた。いろいろとあつて、エルミナは今や俺の奥さんである。

「あ、アシュトじゃん」

「よう。何買ったんだ?」

「ん、これ」

エルミナが出したのは、釣り具一式だった。

竿になんだか見慣れない道具が付いている。丸いものに糸が巻かれ、取っ手のようなものが付けられている……なんだこれ?

「釣り道具、だよな?」

「うん。春になつたし、湖の魚たちも起きだす頃よ。海のお魚は美味しいけど、やっぱり私は湖や川の魚が好きかな」

「なるほど。自分で釣りに行くのか……で、それは?」

見慣れない道具を指差すと、カウンターにいた支店長のリザベルが答えてくれる。

「そちらは『リール』と呼ばれる道具です。取っ手を巻くと糸が巻かれる仕組みになつています」

「へえ……なんか面白そうだな」  
「アシュトもやる? 竿なら一本あるわよ」

「お、いいね。やるやる」

「うん。エサの調達もあるから、明日一緒に湖まで行こう」

「ああ」

おつと、エルミナとリザベルに伝えておかないと。

「そうだ二人とも、近いうちに春の新年会を行うことになつた」

「新年会ですか?」  
リザベルが少しだけ首を傾げた。

「ああ。リザベル、よかつたらディミトリに伝えておいてくれ。招待状は改めて送るからさ」

「わかりました。会長は出席すると思いますが、伝えておきましょう」  
「新年会?? なにそれ楽しそう!!」

エルミナが興奮し始める。

「酒や料理もいっぱい出し、宴会場は拡張までしてるらしいから、結構な規模になるとと思うぞ」  
「わーお!!」

エルミナはウキウキな足取りで店を出ていった。

「新年会ですか……」

「ああ。お前も参加しろよ」

「はい。せっかくですので参加させていただきます」

さて、一度新居に戻るか。ミュディたちにも伝えないとな。

新居に戻り、幼馴染の——いや、もう奥さんか——ミュディの部屋のドアをノックした。「はーい」

「俺だ。開けていいか?」

「どうぞー」

ドアを開け、ミュディの部屋の中へ……って、何気に入るのは初めてじゃね? 「あ、お兄ちゃん」

「ん? シエリーもいたのか。ちょうどいい」

「どうしたの? アシユト」

ミュディの部屋は、可愛らしいぬいぐるみや刺繡の施されたカーテンがあり、ベッドシーツやソファまで、ミュディの趣味全開だった。

花が好きなミュディは、部屋をカラフルな花の柄で彩っていた。思わずきょろきょろしていると、シエリーが言う。

「お兄ちゃん、女の子の部屋をジロジロ見るのはよろしくないよ」

「う、ごめん」

「あ、あはは……」

恥ずかしいのか、ミュディは曖昧に笑った。と、とにかく。さつさと用事を済ませ……

「ん? 二人とも、何か書いていたのか?」

「[?]」

ミュディとシエリーの手に黒いインクが付いていたので、そう質問してみた。

ミュディはともかく、書類仕事が大の苦手で専属の文官を雇っていたシエリーが字を書くとは思えないんだけどなあ……

「べ、別に? それよりアシユト、何か用事?」

「ああ。実は、春の新年会を開こうと思つてな。参加するだろ?」

「も、もちろん!! ねえミュディ」

「う、うん。わたし、いっぱいお菓子作るね!!」

「ああ、頼む。邪魔して悪かつた、それじやあな」

「う、うん」

「ば、ばいばーい」

◇◇◇◇◇◇◇

「あ、あつぶなかつたあ……ナイス、ミコト！」「う、うん。アシストってば、銛すなごいよね」「ええ……まったく、バしゃるといふだつたわ」「うん。結婚式で着るドレスの「デザイン」、まだアシストに見られたくないもん」「そーね。どうせならサプライズで驚おどろかせたいわ」「そうだね。じゃあ、続きを考かえよっか！」

「うん。じゃあまずミコトのこれ、もうちょっと胸元を開けた方がいいと想うつのよ。ミコトってば胸大きいし……」「で、でも、恥ずかしいよ……」「じ、じからじから、はい決定ー！」

◇◇◇◇◇◇◇

よし、薬師くすしとしての仕事もあるし、一度薬院へ行くか。



薬院に行くと、ワーウルフ族のフレキくんが薬草関係の本を読んでいた。

「あ、お疲れ様です、師匠！」

「フレキくん？ 今日は休みのはずだけど」

「いえ、その、ここにある本が読みたくなつて……申し訳ありません」

「ああいや、いいよ。ゆっくりしてくれ」

「ありがとうございます！」

フレキくん、本当に遅くなつたよなあ。冬の間は実家に帰っていたけれど、一冬見ないだけでこんなにも立派になるとは……もう、俺の教えなんて必要ないんじゃないかな？

「あ、そうだフレキくん」

「はい、師匠」

「実はさ、冬も終わつたし新年会を開こうと考えていてるんだ。そこで、ワーウルフ族の方々を招待しようと考えてるんだけど、どうかな？」

「え、えええつ!?」

「あ、さすがに全員は無理だけど……村長や代表の方数名とか、来られるかな？」

「は、はい!! きっと喜ぶと思います!!」

「そつか。近いうちに招待状を送ると思うから、その時はよろしくね」

「はいっ!! ありがとうございます!!」

フレキくんは立ち上がり、ガバッと頭を下げた。

ワーウルフ族の村人には久しく会つてないし、これを機に交流を深めよう。いつも美味しいコメをありがとうございますってね。

少し仕事をしたらまた村を回るかな。



宴会場の前を通りかかると、アウグストさんが図面を広げ、サラマンダーたちに指示を出していた。さつきまで教会を建てていたはずなのに、すごい行動力だ。

「また会いましたね、アウグストさん」

「おう、そつきぶりだな村長。聞いたぜ？ 新年会をやるつてなあ!! がつはつは、この宴会場も狭くなつたし、美味しい酒のために立派なのを作るからよ、こつちも期待して待つてろや!!」

「は、はい。ありがとうございます」

相変わらず、酒が絡むとどんでもなく元気になる。

丸太を運ぶサラマンダー族、ディミトリの館で買った工具で丸太を加工するエルダードワーフ。

そこら中で金槌や不イルガンの音が響いている。すごいな……職人たちの奏でるオーケストラだ。

「あ、そうだ。アウグストさん、いきなりで申し訳ないんですが、この宴会場に個室を作ることは可能ですか？」

「個室だあ？ 何に使うんだよ」

「いや、近いうちに大御所たちが宴会を開くと思うので、ひとりわ立派で広い個室宴会場を建ててほしいんですけど……できますか？」

「いいぜ。村長がそんな願いをすんのは久しぶりだな。まあ任せとけ」

「ありがとうございます!!」

俺は頭を下げる。

大御所つてのはシエラ様こと緑龍ムルシエラゴ様をはじめとする、神話七龍の方々のことだ。ここにみなさんを集めて宴会するつて言つていたし、でかい宴会場でやるより、立派な個室でやる方がいいと思う。

日が傾いてきたけど、もう少し村を回ろう。



「まんどれーいく

「あるらうねー」

『ア、アシユト』

「マンドレイクとアルラウネ……あれ、ウッドとベヨーテは？」

フンババの頭の上で、薬草幼女のマンドレイクとアルラウネが日光浴をしていた。

おかしいな、でもウッドとベヨーテがいない。どこ行つたんだ？

『ウッド、ベヨーテ、センティアソンデル。オラ、マザリタイ』

「あ、そうなのかな。というかセンティイ、起きたんだな」

センティイは寒さが苦手で、冬になつたら解体場の近くに深い穴を掘つてほとんどずっと寝ていた。

呼ぶと出でてくるが、身体の動きが鈍かつたので、冬は仕事を休みにしてのんびりさせた。関節が凍つてしまい、調子が出ないのだとか。

「まあ、あいつもずっと寝てたし、遊ぶのもいいだろ」

『オラ、イツショニニアソビタイ、アソビタイ……』

「フンババ……よし、じゃあ俺と一緒に村の散歩でもするか？ ずっと門番じゃ大変だし、お前もリラックスしないとな」

『イイノ？ ……モンバン、シゴト』

「少しくらいならないいさ。ほら、久しぶりに乗せてくれよ」

『……ウン!! オラ、アシユトトサンボスル!!』

フンババは、マンドレイクとアルラウネが乗った頭の上に俺を乗せて、村の中をゆっくり歩きだす。その足取りは、心なしか弾んでいるようを感じた。

そのまま村を散歩していると、後ろから久しぶりに聞く声が。

『お~い、アシユトそんちょお~』

「ん……おお、センティ、久しぶりだな」

『アシユト、アシユト!!』

『ヨウ、アシユト』

「おお、ウッドにベヨーテも」

『ヨウ、アシユト』

「センティに乗ったウンドとベヨーテだ。」

大ムカデが村を這い回る光景は異様だが、センティも立派な村の仲間だ。最初は銀猫族やハイエルフたちは近付くのを恐れていたが、コミニニケーションが取れるようになってからは、気さくな性格だとわり、怖がることはなくなった。

それに、センティの長い身体を使つた滑り台は、村の人気アトラクションだ。

『いやあ、気持ちのいい季節になりましたなあ』

身体が長すぎるのに半分以上を巻き、まるでカタツムリみたいな姿でフンババの隣を歩

くセンティ。

「ああ。もう春だしな。また働いてもらうぞ」

『お任せを!!』

カサカサと隣を歩くセンティは、キシリキシと笑った。

すると、俺にもたれかかっていたマンドレイクとアルラウネが服を引っ張ってきた。

『まんどれーいく』

『あるらうねー』

「ん、よしよし。お前たち、あっちに行きたいのか?」

どうやら、センティの背中に移りたいらしい。

フンババが二人の薬草幼女を手に載せ、センティの背中に移動させた。

『センティ、センティ、ダツシユ、ダツシユ!!』

『まんどれーいく』

『あるらうねー』

『へへ、カゼニナロウゼ!!』

『お、いいっすよ!! 久しぶりにワイのダツシユを見せてやりましょ!!』

『お、おいセンティ』

あんまり無茶はするな、と言ふ間もなくセンティはダツシユで消えた……は、速い。

まあ、これからまたいっぱい働いてもらうし、鈍<sup>なま</sup>つた身体を動かすのはいいことだろう。それに、フンババと二人の散歩も気持ちいい。

「フンババ、ユグドラシルへ行こう。シロに会いに行くか」

『ワカツタ。オラ、シロニアイタイ』

フンババの頭の上はかなりフカフカで、春の陽気と合わると眼<sup>ねむ</sup>くなつてくる。横になるスペースはさすがにないが、このまま寝てしまいそうだ。

『アシユト村長、アシユト村長!!』

「ん……フンババ、ストップ。つて、ディアーナか」

「はあ、はあ……ようやく追いつきました」

ディアーナは肩で息をしていた。フンババの歩調はそんなに速くないが、歩幅<sup>ほは</sup>が結構大きい。追いつくにはかなり走らないと駄目<sup>だめ</sup>だろうな。

「招待状の送付リストを作成しましたので、チエックをお願いします」

「……用件はそれで終わり?」

「はい」

おいおい……それだけで俺を探してたのか。

今日は村を回つて、いろんなところに顔を出している。俺を見つけるのも大変だつたらう。

ろう。

ろう。

よし、ちょっと狭いけど……

「フンババ、頼む」

『ワカツタ』

「え? ……きやあつ!?

フンババは首を傾げるディアーナをむんずと掴み、頭の上に。

肩が触れあう距離<sup>きり</sup>で隣に下ろされたディアーナは、一気に顔を赤くする。

「な、な、な……」

「散歩しながらでも書類は確認できるだろ? ほら、見せて」

「は、はは……はい」

ディアーナに渡された書類には、招待状を送る人の名前が書いてあつた。

ハイエルフの里からはジーゲベッグさんと数人。ワーウルフ族の村からは村長とヨルフさん、ヴォルフさんの兄弟、そしてフレキくんの家族たち。ベルゼブブ関係からはデイミトリ、ルシファー(なぜか文字にためらいの跡<sup>あと</sup>があつた)、村に働きに来ているデヴィル族。セラフィム族のアドナエルにイオフィエルさん、エンジェル族の整体師たち。お、マーメイド族もいる。海の町を案内してくれたギーナとシード、あとマーメイド族の長口ザミアさん。

「結構な数だな……」

「は、はい。その、アウグスト様に確認したところ、宴会場の改築はあと七日ほどで終わるそうです。準備期間も含め、開催日は十日後などでいかがでしょう……」「そうだな。そうし……」「あ……」

「あ……」

横を向くと、目と鼻の先にディアーナの顔があつた。

オシャレメガネの奥に光る赤い瞳と目が合う。や、やっぱい……意識しなかつたけど、この距離つてかなり危ない。

「そ、その」

「は、はい」

顔を背け、とりあえず謝ろうとした時だった。

『ツイタ、アシユト』

「え、あ」

『きやんきやんっ!! きやんきやんっ!!』

大樹ユグドラシルに到着し、フエンリルのシロが尻尾をブンブン振りながらフンババの周りをぐるぐる回っていた。俺は急いでフンババから降り、シロをワシワシンと撫でまくる。

俺は急いでフンババから降り、シロをワシワシンと撫でまくる。

「よーしょーし、ほらディアーナ、お前も撫でろよ!!  
『きやうううんっ!!』

「は、はいっ!!」

ふう……なんとかこまかせた……のか?



日も暮れ、フンババとの散歩を終えて新居へ。

家では、泥まみれのマンドレイクとアルラウネが、シルメリアさんにこびどく叱られていた。話を聞くとセンティとの散歩中に水溜まりに飛び込んだらしい。

「まんどれーいく……」

「あるらうねー……」

「まったく……ほら、お風呂に行くわよ」

「あ、わたしも行くーー」

龍人の王族姉妹、ローレライとクララベルが二人を風呂へ連れていった。やれやれ、

春の陽気にしてられたのかねえ。元気なのはいいことだけど。夕飯はシルメリアさんたち銀猫三人による特製海鮮丼を食べ、風呂に入つて自室に戻る。

ウッドやベヨーテは、外で寝るようだ。もう寒くないし、また部屋は俺一人。ベッドに入り、欠伸<sup>あくび</sup>をする。

「……明日も頑張ろう」

新年会の準備……まだまだやることがいっぱいだ。



新年会を開くと決めた数日後。

招待状も送り、開催まであと少しとなつた。

宴会場の改築工事が終わり、銀猫たちが食材の仕込みや料理の打ち合わせで忙しい毎日を送っている。彼女たちは準備が楽しくて仕方ないのか、みんな笑顔だ。

酒蔵から酒樽<sup>さかわら</sup>を出したり、来客宿泊用の家の掃除をしたり、村は新年会に向けて動いている。

俺もそこそこと忙しく働いていた。中でも大いに悩<sup>なや</sup>んだのが、宴会での席順だ。宴会場は立食形式だが、来客の中での重役には席を用意したんだよな。

会場のレイアウト関係はパーティの経験が豊富なローレライとシェリーに任せ、ミュディは調理組に参加した。

エルミナとクララベルは会場の飾りつけをして、ミュアちゃんとライラちゃんも手伝つた。

改築した宴会場はかなり広くなつており、五百人規模のパーティーも容易<sup>たやす</sup>く行える。

料理は会場の壁際に並べられ、ドリンクコーナーやステーキをその場で焼くコーナーを設けたり、ミュディが力を入れてているスイーツコーナーも設営する。

メインは、デーモンオーラのみなさんが本気で狩ってきた全長三十メートルはある茶色いドラゴンで、『ライノセラスドラゴン』という國家レベルで危険な魔獣だ。

この新年会の発起人でもあるノーマちゃんが狩りで大張り切りしていたらしく、彼女のテンションにつられて盛り上がり上がったデーモンオーラの二家族が獲<sup>と</sup>ってきた。

ノーマちゃんは本当に喜んでいた。

「ねえ村長、あたしがパーティーしたいって言つたからこんな……」

「いや、それもあるけど、春のお祝いをしたいってのが本音だよ。ノーマちゃんは俺に気付かせてくれたんだ。本当にありがとう」

「村長……さいつこうだね！ 明日も美味しい肉いっぱい狩つてくるから！」

つてな感じで、ノーマちゃんは去つていった。

別れ際にアーモさんが申し訝なさそうに頭を下げたけど、ノーマちゃんがきつかけで新年会を開催しようと思えたんだ。謝るなんておかしい。